「犬」の成立をめぐって

木内英実

一　「犬」の問題点

（一）定稿の問題

「犬」の初出本文は当時和辻哲郎が編集を務めた岩波書店の『思想』第七号（大正十一年四月一日発行）に掲載された。但し題名の下に「（未定稿）」との記載がある。初版としては、「島守」を巻頭に掲載し『犬』として岩波書店より大正十三年五月十日発行されている。

角川書店発行全集（以下、角川版全集と省略）と岩波書店発行全集（以下、岩波版全集と省略）との間での本文の相違、特に伏字の有無に大きな違いがある。岩波版全集第二巻「後記」に、初出における伏字箇所の列記と底本とした単行本と角川版全集本文との校合結果が掲載されている。

静岡市に中勘助遺族によって寄贈された資料（以下、静岡市資料と省略）の調査より「犬」稿の変遷経過が更に判明したので、二章に報告する。

（二）方法の問題

「犬」論には、作品に描かれた内容やテーマに関わる論考に比し、方法論についての論考が少ないことが挙げられる。

「提婆達多」創作において漱石を意識していたとの指摘が[1]市川浩昭によってなされた。大正十三年の秋から昭和六年まで勘助の身の回りの世話を行った[2]中島まんの証言によると、「又度々きかされました事は、私は私の師と仰ぐ人をほしい、師と仰ぐ人は一人もないと云ふ事は、お仕事のなさる度毎にきかされました」と師による作品批評を求めていたことが分かる。

筆者は「提婆達多」脱稿の約二年後に初稿脱稿した「犬」も漱石を意識した作品と考え、擬人化の方法をとる「吾輩は猫である」（以下、「猫」と省略）との比較において方法を探る。

二　定稿について

（一）角川版・岩波版全集本文への経過

角川版全集第二巻収録「犬」の底本について、同書「後記」では触れられていない。

しかし、静岡市資料番号013F003（初出誌への書き入れ稿）の確認から、その資料が底本と確定された。静岡市資料番号013F017（二校）と校正が重なるにつれ漢字の訂正と振り仮名が書き加えられて

いったことが分かる。また、静岡市資料番号019E002角川版全集第二巻（一刷）本文にも更に校正が加えられている。

岩波版全集第二巻収録「犬」の底本は初出と「扉に『三二、八、七再稿』とある中家蔵の著査書き入れ本」と同書後記「犬」解説に記載されている。

しかし、底本の一冊になったと推測される書き入れ本の指摘は正確でない。

同書口絵に「単行本『犬』著者書き入れ」と解説された頁写真に相当する書き入れが残るのは静岡市資料番号125F001の書籍（大正十三年五月十日、岩波書店刊の単行本『犬』書き入れ本）である。同書の扉には黒字で「昭和三十年誤字、句読等調べ済」その横に赤字で「犬モ句読等調べ済三十二年五月十八日　島守　犬　原稿紙に書きかへる」と三行に亘って書き入れられ、「犬」の題字頁（五六頁と五七頁の間）に「三二、八、七　再校　写シカヘノ時尚忘不句読（一字判読できず）良スルコト」と赤字で書き入れがある。

同書を包んでいた岩波書店名入り茶封筒から岩波書店編集部とやり取りがあったことが分かる。

これより、「犬」稿の変遷の経過は、勘助存命中に校正可能だったと想定できる範囲で、①初出（未定稿）『思想』第七号（大正十一年四月一日刊）掲載→②岩波書店版単行本『犬』（大正十三年五月十日刊）→③静岡市資料番号125F001「句読等調べ済　三十二年五月十八日」「三二、八。七、再校」稿→④静岡市資料番号013F003角川版全集への収録を目的とした初出への書き入れ（角川版全集「犬」初稿）→⑤角川版全集「犬」初版（昭和三十六年一月三十日刊）→⑥角川版全集「犬」二刷（筆者未見）→⑦角川版全集「犬」三刷（昭和四十年八月三十日刊）と考えることができよう。

昭和三十二年五月当時、勘助は親しい人への書簡に、角川版全集の準備で多忙であることを綴っている。つまり③は角川版全集への収録を目的とした下調べであり、③と④は時期的に極めて近いと考えられる。

①は性描写を大幅に伏字した結果、公刊されたが、勘助も予測していた風俗壊乱による発禁処分を受けた。

伏字復元の観点では、③には②の伏字部分に復元の書き入れが認められる。④には①の伏字部分に復元の書き入れが認められるも、その部分はさらに二重線で消され伏字にされている。結果的に伏字部分は①よりも増えている。⑤・⑥・⑦においても伏字部分は復元されなかった。

勘助は、作者の編集意図が多く反映された角川版全集において、伏字部分を復元させた稿を意図的に世に出さなかった、と言えよう。

勘助逝去後に伏字復元稿を底本とする単行本が岩波書店より発刊された。その変遷は次のように整理される。

①・③→⑧岩波書店版単行本『犬』第二刷（昭和五十八年六月三日刊）→⑨岩波文庫『犬　他一篇』（昭和六十年二月十八日刊）→⑩岩波版全集「犬」（昭和六十四年十一月二十一日刊）

⑩に関して、後記「犬」解説に「角川書店版全集に従って振仮名を適宜補った」とあるので、参照した角川版全集の刷は不明だが⑤・⑥・⑦いずれかを参照したものと考えられる。

定稿としては、作者の構想通りの表現であるという点では、勘助が伏字を復元した③と考えられる。しかし、自らが編集した全集において、別表のように、多くの部分に校正の手入れを行い④を出し

たことから、勘助は伏字の存在を作品の完成度と切り離して考えていたようだ。

「犬」の場合、もと人間であった犬に夫婦生活を語らせるという内容であり、昭和三十年に発行者・訳者共に有罪の最高裁判決が出た「チャタレー裁判」の問題点とは一線を画す。時代背景を考慮しても、その当時、勘助が伏字復元稿を世に出すことは可能であった。④ではそれをしなかったばかりか、「あとがき」において「この人騒がせな作品は自分ではよく出来たと思つてゐる」と作品への満足を表している。

これらの点から④も作者本位の定稿と評価できる。

（二）角川版全集本文の特徴

岩波版全集第二巻後記には底本とした岩波版単行本（前節の②）と角川版全集本文との校合結果が記されている。この度、前節④の角川版本文初稿（初出への書き入れ）と⑤への書き入れ本の存在が判明したので、前節①と④との校合結果について以下に述べる。まず数多い校正箇所として以下の㋐～㋚が挙げられる。

㋐句読点の削除…102箇所
㋑漢字への振り仮名・送り仮名の加筆、漢字のひらがなへの、旧仮名の新仮名への書換…42箇所
㋒繰り返し記号「〻」「ゝ」、踊り文字「〳〵」の文字への置換…126箇所
㋓「ゐた」→「た」、「ゐる」→「る」、「であつた」→「だつた」、「である」→「だ」の置換…88箇所
㋔「が」↔「けれど」「とはいえ」「そして」、「とはいえ」→「しかし」「けれども」の置換と削除…13箇所
㋕会話と独白部分のカギカッコの削除と行詰め（但し、会話文・独白分の前後は一字分空白）…10箇所
㋖伏字復元後の二重線での削除・更なる伏字指示…29箇所
㋗助詞「て」「も」「を」「と」「は」の削除…22箇所
㋘強調記号の削除…10箇所
㋙主語の削除…5箇所

右の特徴的な箇所を除いた校合結果を別表1として示す。

別表1

№	頁・行（角川版）	初出の表現	前節④角川版初稿の表現
①	一六一・二	掠略することをもつて	掠略することを
②	一六一・九	咀つてゐた	詛つてゐた
③	一六二・三、二二二・一〇、二一八・一一	とうとう	たうとう
④	一六二・五	蘇らすためなのだと	蘇らすためだと

⑤	一六二・一〇～一一	檬果樹があつてあたりに枝をひろけてゐる。その逞しい幹におそろしく太い葛蘿が這ひあがつて	檬果樹があたりに枝をひろげ、その逞しい幹に這ひあがつたおそろしく太い葛蘿が
⑥	一六二・一二～一三	くひあつてゐる様子が、なんだか汚らしい手足と胴體とが絡みあつてゐる様な	くひあつてる様子がなんだか汚らしい手足と胴體とが絡みあつたやうな
⑦	一六三・七	厚ぼつたいだぶ〳〵した	厚ぼつたくだぶだぶした
⑧	一六三・一〇	そして暫くするとは	暫くすると
⑨	一六三・一三	ごく幼少の頃から	幼少の頃から
⑩	一六四・一、一六五・八、一九〇・一一、一九一・四、一九二・一二、一九三・五、一九五・二、一九七・一二、二〇二・一三、二一一・六、二一七・二～三	身體	體
⑪	一六四・五	ことに	殊に
⑫	一六四・一三	坐	座
⑬	一六五・五	ふるはせながら	ふるはせて
⑭	一六五・一一	見すゑたが	見すゑながら
⑮	一六五・一三	そらしてゐたが、	そらしてた彼女は
⑯	一六七・七	とつぷり暮れた。	とつぷり暮れて
⑰	一六八・五	そして落ちついた濁つた	そして濁つた
⑱	一六九・二	ことに對する羞恥・ことに對する愛惜	ことの羞恥・ことの愛惜
⑲	一六九・一二	殆ど宙に浮いて	宙に浮いて
⑳	一七一・二	とはかぎらなかつたけれど	ではなかつたが
㉑	一七一・一〇	手をとつて	手をとり
㉒	一七三・一四	どうかを気づかふのであつた	どうかが気づかはれた
㉓	一七四・二、二一四・四	一伍一什	一部始終
㉔	一七四・三	身重になつているといふこと	身重になつたこと
㉕	一七四・六	せうことなしに	不承不承に

㉖	一七五・七	水がはひつて、一本の	水をいれて
㉗	一七六・六～七	忘れようなどとは露ほど思ひはしなかつた	忘れようなぞとは露ほども思はなかつた
㉘	一七六・九、二〇二・一二	そして	さうして
㉙	一七六・一二	宿営することになつた。	宿営することになり
㉚	一七九・二	特別乱暴な企もしなかつた	特別乱暴もしなかつた
㉛	一七九・六	虎のごとくに	虎のやうに
㉜	一八二・七	ことはどうしても出来なかつた	ことは出来なかつた
㉝	一八二・一〇	つぶつた目	くわつとあけ放つた目
㉞	一八四・一二	貴様は何者だ	何者だ
㉟	一九七・一五	速に	はやく
㊱	一九八・五～六	灰燼のなかにまつ黒になつた死骸がちらばつて、それを	灰燼のなかにちらばつたまつ黒な死骸を
㊲	一九八・七	爪をもつたお仲間うちとして	爪をもつた仲間として
㊳	二〇五・三	間違なく方面を	間違ひなく方向を
㊴	二〇五・六	間違はず	違はず
㊵	二〇五・七	後ろのはう	後ろに
㊶	二〇五・一一	私は逃げそくなつてしまつた	逃げそこなつた
㊷	二一一・一〇	きゅんきゅんと啼いた	啼いた
㊸	二一一・一三	運悪くとうとう出会はなかつた	運悪く出会はなかつた
㊹	二一一・一五	ともかく相應の	相當の
㊺	二一二・一	歩いたのだけれど	歩いたのに
㊻	二一二・五	噛みついて無茶苦茶にがりがりと	噛みつき無茶苦茶に
㊼	二一三・五	匂がしてごちゃごちゃに互に	匂がごちゃごちゃに
㊽	二一三・九	藪のなかを	藪を

㊾	二一三・一五	見るばかりである。	見るばかり。
㊿	二一七・一〇	本然の傾向に戻つた	本然の傾向に悖つた
51	二二三・一	それとともに	同時に

三　方法論について

（一）勘助による「猫」評価と「銀の匙」独創性への自負

勘助は、一高・東京帝国大学英文科時代の恩師・漱石の推薦により「銀の匙」とその後篇「つむじまがり」が東京朝日新聞に掲載された幸運な作家である。勘助自身、漱石から「銀の匙」絶賛の書簡を生前大切にしており、現在静岡市によって保管管理されている。しかし勘助の漱石の作品に対する評価は決して高くない。

大正六年六月号の『三田文学』に掲載された「夏目先生と私」では、漱石の「猫」に関する勘助の回想は他の作品に比し多い。

「猫」が評判になった頃は「併しその頃の私は詩歌ばかりを愛読して散文といふものは見向きもしなかつた」、「『吾輩は猫である』はその表題からして顔をそむけさせるに十分であつた」と関心外であり、大学入学後も「はじめて『猫』を手にとつてみたが、はじめの百頁内外で厭きてしまつたきりいまだにその先を知らない」と述べた。

大学の講義中の漱石による、次のような「猫」にまつわる言動もそこには記録された。

また別の先生が「猫」を評して　自分はあの中の人物や事件を知つてるから面白いがさうでない人にはさほどでないだらうといふようなことをいつたといふ話をして

「そんなんぢやない」

といつた。また遠方の知らない人がそつくり「猫」のまねをして書いたものを送つてよこしたといつた。そして

「なるほどよくまねてあつたが、そんなことをしたつてつまらないぢやありませんか」

といふやうなことをいつた。先生は独創がなくてはいけないといふことを度たびいつた。

岩波書店版『中勘助全集』第四巻（昭和六十四年十月二十三日刊）

これより当時の「猫」の模倣作を漱石自身が「独創がなくてはいけない」と批判していたことが分かる。

漱石が「銀の匙」に独創性を認めていたことを勘助自身が同稿で記述している。

先生はまた　子供の時のことを書いたものといへばトム　ブラウンやバッド　ボーイがあるが書いてある方面がちがふ。谷崎氏の「少年」はああいふもので「銀の匙」とは少したちがちがふし「銀の匙」のやうなものは見たことがない　といつた。先生は　綺麗だ　といつた。細い描写　といつた。また　独創が

ある　といつた。私は「独創」といふ言葉をきいて　大学以来だな　と思つた。　　前掲書

（二）「猫」と「犬」との構造の比較

「猫」受容者による「追随作」約百二十作[3]は日比嘉高により「同工異曲もの　飼い猫の視点から主人の家を観察し語るという趣向を借りて、別の世界で同趣の物語を行う」「続編　『猫』の吾輩や他の人物の後日談を語る」「手引き書　専門的な知識を普及させるために、当の知識の対象（養蚕なら蚕、映画ならばフィルムなど）が一人称『吾輩』となって叙述を行う」「タイトル（のみ）の参照　内容は『猫』と直接関係ないが、『吾輩は～である』というタイトルをもつ」と四分類され、勘助同様、漱石山脈の一端を担う内田百閒の代表作『贋作　吾輩は猫である』はその中に含まれる。日比の挙げる追随作の中に「犬」は含まれない。「犬」こそ漱石の影響を受けた勘助が、独創性を駆使した自信作と言えよう。

「犬」と「猫」の作品構造を対照すると別表2のようになる。

別表2

	A「猫」	B「犬」
①作品内の時代	日露戦争下（明治三十七年六月頃～明治三十八年十一月頃）	ガーズニーのサルタン・マームードのインド侵略下（一〇一八年十月頃から一〇一九年）
②初出時	明治三十八年一月	大正十一年四月
③主人公	一人称の語り手の猫（「吾輩」）	ヒンズー教の僧・娘（共に名前が記されず、犬へと変身を遂げる）
④語りの内容	猫が見聞きした苦沙弥ら「太平の逸民」の言動	娘の恋の結末・娘犬が体験した僧犬との望まぬ夫婦生活・僧の破戒と異教徒殺害の経緯・僧犬が望んだ娘犬との夫婦生活
⑤食の記録	雑煮の餅	娘犬…死産した嬰児・殺された人間の睾丸・大きな魚の頭
⑥主人公が体験する暴力	猫が行う「蟷螂狩り」「蝉取と云ふ運動」（「鼠狩り」）	娘の経験……異教徒からの性暴力・主人からの虐使・僧からの性暴力 娘犬の経験……僧犬からの性暴力、四匹の子犬の死 僧の経験……異教徒からの迫害・異教徒への復讐・娘への性暴力 僧犬の経験…娘犬への性暴力・娘犬から噛み殺される
⑦主人公の最後	溺死（「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と唱えながらの「大往生」）	僧犬…噛殺 娘……元の人間の姿に戻るが裂けた大地の奈落へ落ちる（湿婆神への祈りの結果）
⑧権力者	実業家・男爵・軍人	征服者（娘・僧ら現地人に対し）・主人（孤児である娘に対し）・宗教者（カースト下位の娘に対し）・「強さ」と「智慧」を持つもの（犬において）

（三）時代背景と暴力

別表2内、項目①について[4]、山田有策の指摘を始め、A「猫」では、日露戦争に関する言説が多数認められ、漱石の文明観を窺い知ることが出来る。

中でも[5]小森陽一は、「⑥主人公が体験する暴力」にあるような猫によって「運動」と評される種種の狩を戦争のメタファーとして漱石が表現した箇所に注目した。小森は、「鼠狩り」の「『吾輩』は自らを『東郷大将』になぞらえ、鼠軍団を『バルチック艦隊』と称し、鼠が姿を隠している『戸棚』を『旅順椀』と呼んでいる。『大運動』としての『鼠狩り』は、日露戦争なのだ」と述べた上で、「大運動でない代りにそれ程の危険がない」「蟷螂狩り」と「蝉取と云ふ運動」の描写に触れ、「『吾輩』の語りからは、他者を殺傷する欲望と、強姦における暴力への欲望とが等質であることが見えてくる」「その語りの中にも、性的欲望と連動した描写があらわれてくる」と、作品の時代背景としての戦争と主人公の性暴力への傾倒を「欲望」というキーワードのもと関連付ける。

「猫」では隠喩として表現された戦争と性暴力との関係を顕在化したのが、「犬」と言えよう。「猫」では蟷螂・蝉に暴力を行使する「吾輩」の視点から描写されたものが、「犬」においては被害者である娘（娘犬）の体験として描かれる所に大きな相違がある。

別表2内、項目①⑥「犬」の部分を確認すると、時代背景としての「征服者」サルタン・マームードの軍隊が印度に侵入し、現地人「偶像崇拝者」の文化を破壊していったという大きな暴力が描かれる。その過程で「征服者」である回教徒の青年士官から「現地人」の娘が強姦されるという事件が物語の発端にある。娘が宿した胎児の父親に一目会いたいと神に願掛けに通う途中で出会ったヒンズー教の僧から、異教徒と通じた事を非難され堕胎を強要された上に、さらに強姦される。同民族間での心身両面に及ぶセカンドレイプは、性的執着から僧が自らと娘を呪法によって犬と変身させた後には、夫婦間におけるドメスチックバイオレンスと形を変える。当初はカーストの上位者による下位者に対しての、犬の夫婦になってからは夫による妻に対しての性暴力が描かれる。

その間に僧は呪法によって恋敵の青年士官を殺し、その報復としてマームードによって町が焼き払われるという事件が起こる。僧犬との間に産まれた子犬を犬に殺された娘犬は逃亡の末、僧犬を噛み殺す。

異民族間の戦争という暴力と、同民族間、同種間、夫婦間の暴力が連鎖して物語は進展する。

（四）「五官全体へ戦慄的に訴える表現」

「犬」では別表2内、項目⑤「殺された人間の睾丸」のように戦争下、飢えた犬がマームード軍により焼き討ちにあった町で犠牲者の肉を食す場面が描写される。これより、「猫」発表と同時期に漱石が『帝国文学』明治三十九年一月号に発表した「趣味の遺伝」冒頭の「陽気の所為で神も気違になる。『人を屠りて飢えたる犬を救え』と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満州の果まで響き渡った時、日人と露人ははっと応えて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた」という表現を勘助が意識下においていたのではないだろうか、と推測される。この文章中の「犬」を[6]「漱石が忌み嫌った『天下の犬ども』すなわち無教養で傲慢な実業家や役人」と

比喩表現として捉える説もあるが、言葉どおりに受け止めるならば、飢えた犬が犠牲者の死体を食べる場面は、戦争の醜悪で残酷な実態の象徴表現と言えよう。

「猫」では「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊つてゐる」と子供に言われるような、餅に食い込ませた歯が取れなくなるという、人間の食べ物を食べたことによる滑稽が描かれる。それに対し「犬」の場合、恐ろしいカニバリズムが描かれる。

堀部功夫[7]は「銀の匙」の表現上の特徴の一つを「視・聴覚だけでなく、嗅・味・触覚をふくめ五官全体へ戦慄的に訴える表現」と述べた。「犬」の表現にもこれは当てはまる。次にそれらの表現を挙げる。

そこで彼女は胎児をぱくりと口にくはへた。で、舌を手伝はせながら首をひとつ大きくふつて奥歯のはうへくはへこんだ。そして二つ三つびゆつと噛んでその汁けを味つたのちごくりと呑み込んでしまつた。

（「死産した嬰児」）

それはぬらめいて渋みのある、こりこりしやきしやきした物だつた。彼女はあらまし噛み砕いて苦労して呑みこんだ。むつとする嗅気が出た。

（「殺された人間の睾丸」）

で、大急ぎでぐわつと噛みついて無茶苦茶にがりがりと噛み砕いてのみこんだ。彼女は幾度も喉に骨をたててはぎやつと吐き出した。

（「大きな魚の頭」）

岩波書店版『中勘助全集』第二巻（昭和六十四年十一月二十一日刊）

（五）三人称の語り

別表2内、項目③のように勘助が「猫」追随作の多くが採用した一人称ではなく三人称を選んだ理由について、漱石の「文学論」第四編第八章「間隔論」Ivanhoe における佳人 Rebecca による戦況報告場面を例にあげ、説明を試みたい。

漱石の解説を要約すると、通常 記事→著者→読者 であるが、作品の幻惑度が高いと著者の存在を読者が忘れて 記事→読者 となる。Rebecca による戦況報告場面のように、叙述者の語りが生き生きとしている場合、著者と叙述者が入れ替わり、記事→R→読者 となる。さらに幻惑度が高いと 記事＝読者 となり、著者が疎外視され 記事＝読者―著者 となる。

原子朗[8]は「猫」の一人称の語りを「文体論的には、そうした〝神〟の立場に近い猫の視点が、たえず作者の精神の構造を読者に感じさせずにはいない。が、そのことは文学としてプラスなのかマイナスなのか、にわかには決めがたい。（中略）私たち読者は『猫』にひきずりこまれて、たしかに 記読 となることもできるものの、指摘してきたように著である作者漱石の眼光や精神の構造を圏外に放つことはできないからである。猫の姿はあくまで仮の姿であって、そこに著者の生な精神を読み取らされることを余儀なくされる。」と論じる。

三人称の語りを採用しながらも、記事→僧→読者 もしくは 記事＝読者 という効果を上げている「犬」の表現の一例を次に挙

げる。

彼は背面の隅の地面に近いところに明りの漏れる小孔を見つけて、そこへいやな恰好に四つ這ひになつて腹をひどく波たせながら覗きはじめた。

それとは知らず娘は一心不乱に祈願をこめてゐる。うす暗い燈明の光がこちらから半裸の半面を照らしてふんわりした輪廓を空に画いてゐる。しつかりと肉づいてのびのびした身体が屈んだり伸びたりする。むりむりした筋肉が尺嚄のやうに屈伸する。彼はその一挙一動、あらゆる部分のあらゆる形、あらゆる運動をひとつも見逃すまいとする。娘はつつましく膝をとぢ、跪いてじつと神像を見つめたのち、祈願の言葉を小声にくりかへしながら上体をまげて、両眈と額を地につけて敬虔に平伏する。うなじから背筋へかけて強い弓のやうに撓んで、やや鋭い角をなしたゐしきがふたつ並んだ踵からわづかにはなれる。娘は起きあがる。顔が美しく上気してゐる。今度はかた膝をふみ出し左手を土についてて身を支へながら、及び腰に右手をのばして神像に浄水をふりかける。丸丸した長い腕、くぼんだ肱、肉のもりあがつた肩、甘い果のやうにふくらんだ乳房、水水しい股や脛、きゆつと括れた豊かな臀……その色と、光沢と、あらゆる曲線と、それは日々生気と芳醇を野の日光と草木の薫から吸ひとつて蒸すやうな匂をはなつ一匹の香麝のやうに見える。

燈明が消えかかつたので娘はかたよせた着物をとつてぐるぐると身につけはじめた。韻律正しい詩がこはれて平板な散文になつた。彼は非常な努力をもつてそこをはなれた。

岩波書店版『中勘助全集』第二巻（昭和六十四年十一月二十一日刊）

娘が全裸で祈る姿を僧が覗く場面だが、煽情的というよりも美しい気品が漂う裸体描写である。「ふんわりした輪廓」「しっかりと肉づいてのびのびした」「むりむりした筋肉」「丸丸した長い腕」「きゆつと括れた豊かな臀」など勘助特有の音感豊かな言葉が用いられる中で、僧の視点が読者の視点に重なり、記事＝読者の効果が生じている。

四　まとめ

第二章の結果として、単純に文章量の点で角川版と岩波版の全集本文を比較した場合、角川版は一頁（43×16）字の組み方で約62頁、岩波版は一頁（44×16）字の組み方で約68頁というように、角川版の方がコンパクトに収まっている。

第二章（二）の別表1のほぼ全項目が表現を短く平易にした校正である。中でも㉝のように怪奇映画さながら起屍鬼の表情を「くわつとあけ放った目」とドラマチックにした校正もある。

これら角川版全集本文校正の結果から、本文全体が短くなり、次から次へと驚くべきエピソードが行動中心に語られ、スピード感溢れる展開となった。

第三章（四）（五）に本文中より抜粋した表現にも表れたように、勘助自身、自身の表現上の特徴とその効果を理解した上で、普通の人間が体験しえない異常な世界に読者をいざなうことに成功している。

別表2内、項目④のように猫が垣間見た人間の生活を人間のように見聞きし語るという擬人化の方法を単純に換骨奪胎したのではなく、元人間だった犬が本能的・外面的には犬の生活、その実、内面的には人間の夫婦生活を語る方法で、「犬」にはひねりと独創がある。

第三章（四）において説明した別表2内、項目⑤「食べ物の記録」にある表現と方法の点により、「猫」が猫に人間の食べ物を与えつつ場面を描き、猫を人間に近づける方法を採用していたのに対し、「犬」の場合、犬ならではの食行動を描き、人間を犬に近づける方法を採用している。娘犬の本能に基づく食行動の場面や怒りに基づき僧犬を噛み殺す場面では、犬としての行動の後に、人間としての内面的葛藤や絶望が現れるという展開となっている。

また別表2内、項目①のように戦時下、非常事態時の時代背景も勘助の場合、主人公の僧犬・娘犬から財産や社会的階級、人間的な繋がりなど全ての属性を奪う設定として有効であった。

別表2内、項目⑧のように人間世界に存在する階級差が崩れ「力」と「智慧」が尊ばれる犬の世界においてさえも、僧犬は夫婦・宗教等、社会制度を後ろ盾に獣慾を満たそうとする。「猫」では、当時のインテリが社会において、台頭してきた権力を批判したのに対し、「犬」の場合、戦時下で全てを失った僧犬に、無教養で属性を持たない娘犬の視点から、人間としての醜さを認めていく展開となっている。

「犬」において勘助は、人間が社会的属性を失った時にさえも持ち続ける自分本位さに痛烈な批判を与えている。その点で「犬」は人間の根源的悪に迫った作品と言えよう。

以上のように方法・構成の両面で、「猫」を念頭に置きながら、勘助が漱石も高く評価した自らの独創性を忌憚なく発揮した自信作と考えたことは明らかである。

後記

第二章に記した「犬」の新出資料に関しては、平成二四年度静岡市蔵中勘助資料の調査に基づくものであり、本稿での公表共々、静岡市文化振興課、静岡市文化振興財団、中勘助文学記念館の皆さまのお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

注

(1) 「中勘助『提婆達多』とシェイクスピア『オセロ』」『上智大学国文学論集』三十九号、平成十八年一月

(2) 『はしばみの詩―中勘助に関する往復書簡―』渡辺外喜三郎著、勘奈庵、昭和六十二年十二月

(3) 「吾輩の死んだあとに―〈猫のアーカイヴ〉の生成と更新」『漱石研究』第十四号、翰林書房、平成十三年十月

(4) 「猫の生きた時空」『国文学　解釈と鑑賞』四十四巻七号、昭和五十四年六月

(5) 「『運動』という名の殺戮」『漱石研究』十四号、翰林書房、平成十三年十月

(6) 『「吾輩は猫である」の謎』長山靖生著、文芸春秋、平成十年十月

(7) 「『銀の匙』風俗図譜」『「銀の匙」考』翰林書房、平成四年五月

(8) 「『猫』の文体序論」『国文学　解釈と鑑賞』四十四巻七号、昭和五十四年六月